

学内広報

2025.9.24

no.1598



「東京大学RoboTech」がABUアジア・太平洋ロボコンで優勝（8月24日）



第66次隊の隊長・隊員が現場トークを展開

南極地域観測隊活動報告会

包括連携協定から生まれた番組をプレイバック

NHKと東大

読者からのフィードバック

三四郎池特集をめぐって

第66次隊の隊長・隊員が現場トークを展開！ 南極地域観測隊 活動報告会

2024年12月から始まった東南極での観測を終え、今年4月に帰還した第66次南極地域観測隊。初の女性隊長となった原田尚美先生をはじめ、66次隊に参加した隊員の皆さんが活動を振り返る報告会が、9月6日にSHIBUYA QWSにて行われました。スクランブル交差点を見下ろす渋谷のど真ん中のホールで一般向けに語られた内容を、原田隊長の報告を中心にダイジェストで紹介します。



初めて2レグ制で臨んだ66次隊

“今日は小さいお友達から大きいお友達までお集まりいただき、ありがとうございます。第66次南極地域観測隊の隊長を務めた原田です。南極で観測することの意義や楽しさを伝えたいと思います。

第66次の隊員は全体で120名ほどで、4班に分かれて活動しました。全員で活動して全員で帰るのが従来のやり方でしたが、今回は初めて活動期間をレグ1とレグ2に分けました。レグ1の本隊は68名で、輸送、観測、基地設営など、基地

と基地周辺での活動が中心。レグ2の本隊は主に海洋観測の班で、隊員数は38名。レグ1の本隊の出発は12月初旬でしたが、そのひと月ほど前に出発した先遣隊もいて、こちらは南アフリカから飛行機で昭和基地に入りました。過去の気候変動を記録する氷床コアの採取が任務です。もうひとつ、9名から成る別働隊があり、こちらは東京海洋大学の練習船「海鷹丸」に乗り込み、南大洋で観測を行いました。

レグ1の隊員は、成田からオーストラリアへ入り、南西部のフリーマントルから海上自衛隊の南極観測船「しらせ」に乗船、海の動物も視認しながら南極へ。海水がひしめくエリアでは、一旦後退してから助走をつけて重さで水を割って進む「ラミング航法」を繰り返しながら、少しずつ南極へ接近しました。しらせからヘリコプター経由で東南極に位置する昭和基地に到着すると、第65次越冬隊の隊員たちが出迎えてくれました。

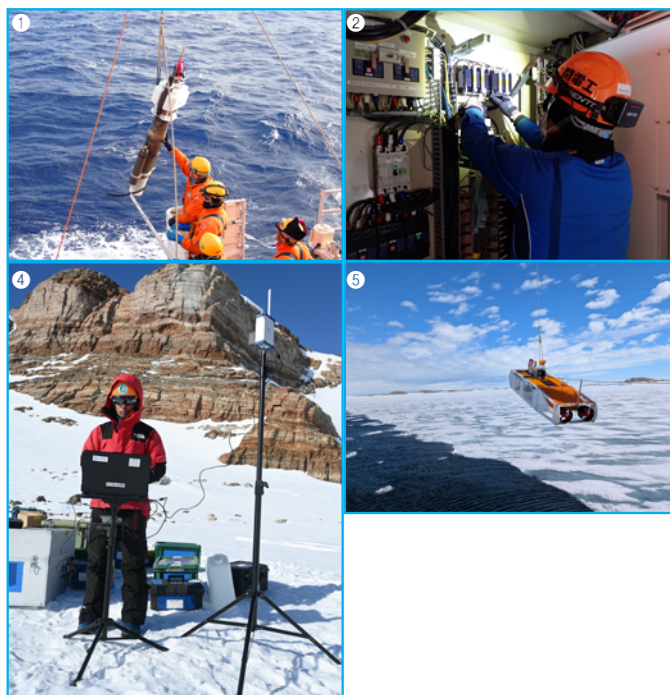
ラジオ体操からゴミ処理まで

ここからは写真を見ながら説明しましょう。昭和基地周辺は、夏には雪が融けて地面がむきだしになります。夏とはいえ、かなりの強風が吹く日もあります。昭和基地の朝はラジオ体操から。66次の設営系が建設した新しい夏季隊員宿舎の写真もあります。観測隊には気象庁から来た隊員5人がいて、24時間体制で南極の気象を観測します。隊から出たゴミを自分たちできちんと処理するのも、南極大陸の環境保全のための重要な活動です。大陸沿岸では国土地理院から派遣された隊員たちが地図を作るための活動を展開しました。丸いドームのある建物は昭和基地のメイン棟で、食堂や隊長室や医務室などがあります。細長い銀色の建物は越冬隊の棟。間をつなぐ黄色い建物が通路棟で、赤い建物は発電機がある発電棟です。外には雪上車が並んでいます。

報告会プログラム @SHIBUYA QWSスクランブルホール

11:20 ~	開会挨拶 (沖野郷子)
11:30 ~	第66次南極地域観測隊活動報告 (原田、真壁)
12:10 ~	ポスター展示見学、コーヒープレイク
12:30 ~	南極観測フリートーク 話題提供: 「レグ1での昭和基地周辺の海水調査活動」(小平)、「レグ1でのAUVの活動」(山縣)、「レグ2の海洋観測活動」(栗栖、前田) 参加: 真壁、漢那、チェン、瀬川 司会: 原田
14:00 ~	閉会挨拶 (津田敦)

総合司会: 濱崎恒二



①「しらせ」から投入された観測装置 (BGCフフロート)。②計画停電からの復旧。③夏の最後に教員派遣の隊員たちが福島の小中学校と中継をつなぎ、南極から授業を実施しました。④地図作成のための測地計測の様子。⑤山縣隊員が手塩にかけたAUV (自律型水中ロボット)「MONACA」。南極の海での無索観測航行が7年越しで実現！



ちなみに、一般の方にはあまり知られていませんが、昭和基地は大陸ではなく、オングル島という島にあるんですよ。

さて、隊員の仕事は観測だけではなくありません。昭和基地にとって年に一度の補給のタイミングが夏。糧食などの物資輸送は夏隊の非常に重要な仕事です。雪上車とコンテナで運ぶ大型物資氷上輸送を行うのは、氷が締まる夜間。夜間といっても白夜なので明るい中での作業です。燃料は昭和基地としらせのタンクをパイプでつないで送り込みます。新しい建築物を作ったり、従来の建築物の修繕も重要な作業です。また、隊員だけで基地運営を成立させる必要があり、何かあったときの準備が非常に重要です。火事が起きたときのために消防訓練を行い、停電が起きたときのためにわざと停電させて復旧させる計画停電の訓練も行いました。

同時並行で、観測系の隊員たちは南極大陸の沿岸部や氷河、海水上で観測を行いました。観測地点への移動手段は主にヘリコプター。リュツォホルム湾の近傍の氷河上に装置を設置して氷が年間どれくらい動いているかを観測したり、活動の礎となる地図を作ったりといった取り組みです。

540mも掘って氷床コアを採取

先遣隊は、飛行機で南極に入り、昭和基地経由で大陸の中央にある「ドームふじ観測拠点II」へ移動して作業しました。この拠点は高度3800mの高地にあり、酸素濃度は渋谷の半分程度。少し体を動かすだけで苦しくなります。夏でも気温

は平均マイナス30度ほど。100万年にわたる過去の気候情報を記録した氷床コアを採るプロジェクトが稼動し、1年目の今年は540m超の深さまで掘削しました。あと2年かけて深さ3000mまで掘り進める計画です。もう一つの班は天文学のチーム。南極は空気がきれいなので天文学の観測にうってつけの場所なのです。このチームは66次の活動としてサブミリ波望遠鏡の設置準備を行いました。

今回、隊の活動期間を2つに分けた理由として、南極周辺の海洋観測の重要度が増していることが挙げられます。さまざまな専門家チームがより難易度の高い観測をできるようにと2班構成にしたのです。海洋観測チームが目指したのは東南極のトッテン氷河沖。南極大陸では西側の氷の融解が急速に進む一方で、東側はあまり融解が進んでいないといわれています。ただ、トッテン氷河付近ではあたたかい海水によって融解が加速しているという仮説があり、それを検証すべく、物理、化学、生物と分野の違うメンバーで統合的な観測計画に着手しました。

海水に鉄はどれほど含まれる？

私たちが行った3月初めは季節が変わって秋に入る時期で、気温は寒い日だとマイナス20度ほど。今回、従来は難しかった「クリーン採水」を行いました。汚染物質の混入を防ぎながら行う高度な採水で、今回は鉄などの金属が海水にどの程度含まれるかを測定するための措置でした。水温、塩分などのほか、植物プランクトンの活性も測れるロボット型の

●隊長補佐を務めた真壁隊員は「東南極の氷床—海水—海洋相互作用物質循環の実態解明」のための観測活動を解説。第67次でも観測を続けます。●小平隊員は海水の変動と砕氷艦「しらせ」の航路選択の研究を紹介。「しらせ」は今回4日で645回もラミングを行いました。●「しらせ」で「紐を切らなきゃ帰らない」と宣言した山縣隊員は、言葉通り「MONACA」で13回の無索潜水を実現。●栗栖隊員と漢那隊員は、南大洋の水に含まれる鉄を「しらせ」で初観測。鉄は船体やケーブルからも溶け出しやすく、汚染のない検出は困難なのです。●生物が関係する炭素循環の定量化を狙う前田隊員。南極付近のクリオネは消化器が黒くよく太っていたそう。●今回は65次のときよりも海が青かった、とチェン隊員。●船内で異分野の研究者と話せたのが面白かった、と瀬川隊員。

観測装置を設置することができました。

まとめると、レグ1において、昭和基地への輸送業務が無事完了し、新夏季隊員宿舎の建築も順調に進みました。先遣隊は拠点IIで540m超の深さまで掘削を実施し、レグ2ではトッテン氷河沖であたたかい海水の通り道に観測点を設けて難易度の高い観測を実施できました（余談ですが、南極では夏でも夜間にオーロラがきれいに見えます。高級な撮影機材などなくても、最新のiPhoneさえあればオーロラ撮影もバッチリですよ）。

今回の瀬川さんのように、若者は南極から帰国後に大きく成長します。南極観測が教育にも貢献することの証だと思っています。次世代にしっかりバトンを引き継げるよう今後も観測隊をご支援ください。

渋谷でイベントを開催しませんか

渋谷スクランブルスクエア15階の会員制共創施設 SHIBUYA QWSは、「渋谷から世界へ問いかける、可能性の交差点」をコンセプトに、様々な問いを持った人たちが交流しながら新たな価値を創造する拠点。本学は渋谷スクランブルスクエア（SCSQ）のアカデミックパートナーとして、QWSにおける各種プログラムの実施や支援を進めています。また、アカデミックパートナーの提案で実施するプログラム「QWSアカデミア」では、大学の多様な「問い」を通じたイベントを開催しています（過去のイベント→ <https://today-qws.adm.u-tokyo.ac.jp/>）。QWSでのイベントに関心がある方は本部社会連携推進課（shakairenkeika.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp）までご一報を。



包括連携協定締結後の番組をプレイバック

NHKと東大

ラジオ放送開始から100周年を迎えた日本放送協会（NHK）と、創立150周年が近づく東京大学は、2023年12月に包括連携協定を締結しました。ここでは、この連携を発端に150周年事業の外部連携部会が準備を進めてきた結果としてこれまでに放映された番組の数々をまとめてチラ見せします。

2023年12月 包括連携協定締結式



NHKの稲葉延雄会長（本学卒業生）と本学の藤井輝夫総長が協定を交わし、安田講堂でトップ会談を実施。連携への期待を語りました。

社会課題の解決策を探るためのセミナーを情報学環で開催。能登半島地震を踏まえ、「災害時の情報発信にデジタルをどう生かすか」をお題に活発な意見を交わしました。

出演●渡邊英徳（学環）、瀬戸寿一（空間）ほか

東大研究者×NHK記者セミナー
災害時のデジタル活用を考える 2024年3月



出演●林香里（理事）、東京大学新聞編集部、Your ChoiceProjectほか

Eテレ特集シリーズ 2025年3月
日本人と東大

第1回／エリートの条件「花の28年組」はなぜ敗北したのか 第2回／壁と翼「女子学生2割」の問いかけ～

第1回では国を背負ってきた東大卒エリートの本質を現役東大生の本音を交錯させながら紹介。第2回では女子学生「2割の壁」の問題が学生団体の取り組みや担当理事の談話などを通して描かれました。



NHKスペシャル 2025年1月
岐路に立つ東京大学
～日本発イノベーションへの挑戦～

東大では近年、起業を促し、イノベーションを生む人材を育成する活動が進んでいます。いわゆる「失われた30年」を打ち破るための取り組みが、総長や教員や学生や卒業生の声を通して紹介されました。

出演●藤井輝夫、松尾豊（工）、柳川範之（経）、小島武仁（経）ほか



NHK WORLD 2025年6月
tiny desk concerts
JAPAN in schools
ちゃんみな

若い世代から圧倒的な支持を集めるちゃんみなが、情報学環・福武ホールのコミュニティスペース「学環 commons」へ。至近距離で7曲を披露し、居合わせた学生たちの問いかけに真正面から応じました。

出演●藤井輝夫、江間有沙（カ）ほか

Eテレ 2025年7月
シンポジウム
生成AIが教育を変える
アジアの大学リーダーたちが考える未来

アジアを代表する大学の学長や理事などの首脳陣が東大に集まり、生成AIと教育がテーマのシンポジウムの模様を紹介。これまで欧米主導で開発が進められてきた生成AIにアジアはどう向き合うのか？



ブラタモリ 2025年8月
第1週 加賀百万石と東大
第2週 東京大学の宝

出演●堀内秀樹（文）、松田陽（文）、須貝俊彦（新）、本郷恵子（史）ほか

100周年を迎えた安田講堂が崖下に建つ理由とは？博物館が所蔵する無数の標本から紹介された意外な宝とは？信長の自筆書から当時の感情も読み解く驚異の技とは？研究者たちの飽くなき好奇心が生み出す宝にタモリさんが迫りました。8月28日には赤門前からの生放送で第2週の番組PRも行われました。

※このほか、安田講堂がテーマの『鑑賞マニュアル 美の壺』（NHK BS）が撮影済（放送日未定）です（案内人＝千葉学（工））。

～読者からのフィードバック～

本誌1596号掲載の

三四郎池特集 をめぐって

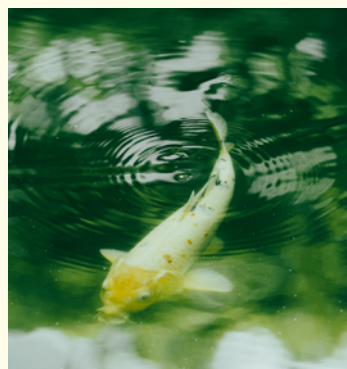
本誌1596号（2025.7.25）の特集「三四郎池について学生&教員有志と考える」を読んだ農学生命科学研究科の教員から、書かれている内容について意見を述べたいという打診が、本部コミュニケーション戦略課に届きました。学内構成員が個人の立場で自由に意見を述べるコラムとして掲載します。

特集「三四郎池について 学生&教員有志と考える」



「錦鯉が仲間に加りました。現在、生態系構築中です」という三四郎池の看板を見て疑問を覚えた農学部学生さんが本部広報課（現・コミュニケーション戦略課）にメールを送ってくれたことをきっかけに生まれた、三四郎池の現状を考える座談会企画。生き物愛する学生、三四郎池周辺を調査してきた生態学の研究者、「育徳園のあり方検討WG」の座長を務めた都市工学の研究者、学生たちが参加する教育プログラムの運営教員に声をかけて行った座談会の模様を収録し、錦鯉文化に詳しい研究者へのインタビュー記事も掲載しました。

↓本編はこちらからご覧ください↓
<https://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou/1596/02features.html>



寄稿

三四郎池の活かし方

7月の『学内広報』に三四郎池の生態系や錦鯉の管理についての議論がありました。私はそれにやや違和感を覚えたので、生態学や生物多様性の専門家として意見を述べたいと思います。

錦鯉は給餌で維持されている

学生さんの意見にあった通り、自然生態系の観点からすれば三四郎池は「終わっている」と言えます。なぜなら、大量の錦鯉やミシシッピアカミミガメ（特定外来生物）がウヨウヨしているからです。視認できる大型の鯉だけでも、30匹ほどいました。森に囲まれた淡水の池はプランクトンや藻類による一次生産量が低いので、総量300kgにも及ぶ鯉を池の物質生産だけで支えるにはエネルギー収支のうえで無理があります。多数の錦鯉が維持されているのは、人による給餌以外にありません。先日、久々に三四郎池を訪れた際にも、パンを与えている観光客がいて、錦鯉やアカミミガメは明らかに人影を追っていました。肉食性が強いスッポンでさえ私に近づいてきました。これは日常的に給餌が行われている証拠です。三四郎池の生態系は、人が池の外から大量に供給する炭素や窒素で維持されていて、「天然の池」とはかけ離れた「人工の池」です。池が臭うのは、富栄養化がもたらした結果に他ならず、Novel ecosystemなどと喧伝できる代物ではありません。

国際自然保護連合は、鯉を「世界の侵略的外来種ワースト100」に指定しています。日本の溜池でも鯉による水草の採食や池底の泥の巻き上げなどにより、沈水性や浮葉性の水草が激減しています。水草が減れば、それを隠れ家や産卵場所とする水生昆虫が減るのは当然です。またアカミミガメも在来の小魚やエビを食べる雑食者です。鯉など外来種がもたらす負の連鎖により、三四郎池は人の給餌で支えられている外来種天国となり、生物多様性の砂漠となっているのです。実際、この規模の溜池ならば、夏季には多種多様なトンボがいるはずですが、私が訪れた際にはわずか5種しか確認できず、普通種のシオカラトンボでさえ数匹がいる程度でした。



農学生命科学研究科教授
宮下 直

生圏システム学専攻で生物多様性科学研究室を主宰。著書に『ソバとシジミチョウ』（工作舎、2023年）『となりの生物多様性』（工作舎、2016年）など。

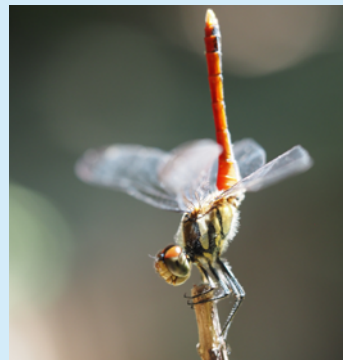
三四郎池にも再生の余地はある

では完全に自然生態系であることを断念すべきでしょうか？ 私はそうは思いません。池を基本的に自然の物質循環に委ねれば、外来種と在来種の低密度での共存が可能だからです。実は、先日訪れた際に、東京都準絶滅危惧種に指定されているリスアカネを見つけました。1匹だけなので近隣から飛来した可能性もありますが、それが移入し、短期的に滞在できるだけのポテンシャルがあるのは間違いありません。自然の仕組みを正しく理解し、復元すべき目標を明確にすれば、疑似的な天然の池へと再生できる余地は残されています。そのためには、観光客による鯉への給餌の禁止、鯉の低密度化、アカミミガメの駆除、在来水草の導入が必要です。そうすることで、鯉と人が近距離で触れ合うことは難しくなるでしょうが、人と野生動物の関係は、本来一定の距離を保つべきものです。水族館や養鯉場ではないのですから。

東京大学が目指すべきネイチャーポジティブの第一番地は三四郎池の再生にある、というのが私の主張です。



ミシシッピアカミミガメ
リスアカネ



（写真提供）筆者

教養教育の現場から

第71回

リベラル・アーツの風

東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

時代の変化に応じて変われる機動性を強みに

／教養教育高度化機構(KOMEX)第6代機構長に聞く

教養教育高度化機構長／
総合文化研究科教授

増田 建



機構に関わって足掛け15年

——6代目機構長の増田先生は機構に以前から深く関わってきたそうですね。

「2010年度に学部長補佐を務めた際、前身の教養教育開発機構と生命科学構造化センターの合併が決まり、一連の整備に関わりました。「学部教育の総合的改革」の一環で初年次ゼミナールを始めるにあたり、2013年度発足の初年次教育部門で部門長を務めました。その後は財務委員長、機構長補佐を務め、2023年度にはアクティブラーニング部門と自然科学教育高度化部門と初年次教育部門をEX部門に統合するのに尽力しました。機構に関わってもう15年ですね」

——この間の手応えはいかがでしょう。

「時代に即して部門の形態は少しずつ変化してきました。生命科学だけだった部門が自然科学の部門になり、そこに教育が加わり、さらにEX部門へと発展しました。当初の使命を終えた部門もあります。毎年、全部門の活動をまとめている報告書を見るたび、意義ある歩みを進めていると感じます。既存の専攻や学科は枠組みがしっかりしています。教育にとって重要なことですが、一方で機動性は

失われがちです。そんななか、この機構は教養学部で一番機動性が高い組織で、時代の変化に対応する意義は大きいはず。ただ、執行部の高齢化が進んでいるので、世代交代の頃合いかなとも感じます」

発展のための部門編成を検討

——新体制での課題を教えてください。

「一つは、執行委員の瀬川浩司先生が定年を迎えるにあたり、瀬川先生が当初から主導してきた環境エネルギー科学特別部門とSDGs教育推進プラットフォームをどうするか。環境エネルギー科学もSDGsも重要度は増しており、何らかの形で継続・発展させることが必要です。GX推進の取り組みや国際卓越研究大学への申請など、全学的な戦略の一環に位置づける方向で検討しています。もう一つはD&I部門の展開です。総長裁量経費が活動原資なので、現総長の任期終了後にどうするか、道筋を立てないといけません。部門の活動は非常に活発で、昨年度は13科目の授業を展開し、講義科目の履修学生数は平均100名超。こちらでも継続・発展の形を探っています」

——他の部門の現況も教えてください。

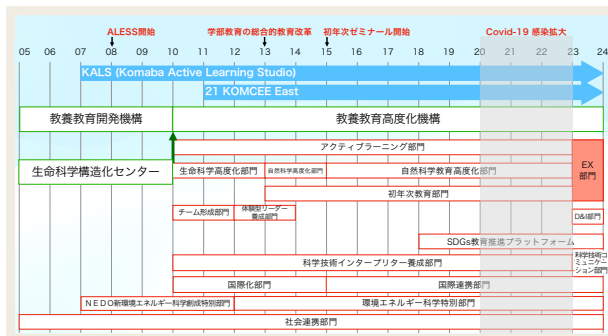
「EX部門で新しく取り組んでいるのは、

教育における生成AI

の活用です。現状を踏まえながら、大学にとって効果的な活用方法を探っています。科学技術インタープリター養成部門は昨年度に科学コミュニケーション部門に名前を変更しました。インタープリターの養成だけでなくコミュニケーション活動を重視しようとの考えからです。国際連携部門では以前から南京大学と連携したリベラルアーツ・プログラム(LAP)を続けていますが、近年はメルボルン大学と連携した活動も強めています。社会連携部門では、博報堂やアクセンチュアといった企業とのコラボ授業を展開しており、社会人も対象の「リベラルアーツ・イノベーション・ヴィレッジ」の活動も始まりました。毎年3月のKOMEXシンポジウムでは、SDGs教育推進プラットフォームと環境エネルギー科学特別部門のこれまでの活動を総括する予定です」

「教養教育の中身はある程度時代にに応じて変わってほしい。たとえば、D&IやGXに関する素養は数十年前にはあまり注目されませんでした。いまは誰にとっても不可欠なものです。時代の風を捉えながら、グローバル・シチズンシップにつながる教育活動を今後も進めます」

KOMEXのこれまでの部門変遷



KOMEXは「伸ばす」「幅を広げる」「人と人をつなげる」の理念を掲げて2010年に発足。「ティーチング」から「ラーニング」への転換を目指す取り組みの一環として設計された少人数チュートリアル授業が初年次ゼミナールでした。ALESS/ALESAは1年生を対象とした英語ライティングの必修科目です。

今年度新任教員
(社会連携部門特任助教)清野真惟
(イタリア政治史)

KOMEXの最近のイベント(3月以降)

3月8日	シンポジウム「ゲームオーディオ研究の過去・現在・未来」(社会連携部門)
3月9日	シンポジウム「多様性と安全」(D&I部門)
3月19日	ワークショップ「アクティブラーニングの試行錯誤〜つくって学ぶ授業を事例にして考える」(EX部門)
3月23日	ワークショップ「第5回東大生がつくるSDGsの授業」(EX部門)
7月26日	Ari Besserさん講演会〜家族の歴史から見えるもう一つの世界史 (EX部門)
9月10日	ワークショップ「授業をふり返って、アクティブにする方策を考えよう」(EX部門)

UTokyo 第38回 バリアフリー最前線!

障害がある職員のお仕事拝見③

駒場・環境美化チーム
の巻



花壇のデザインから生け花まで

駒場キャンパスの花の育成や花壇の管理を担当する駒場・環境美化チーム。障害のある職員6人とコーディネーター3人のチームです。全部で16ある花壇の構図案作りから種まき、花の育成、除草など1年を通して花壇を中心とした業務を行っています。育った花は生け花に、つる性植物などはクリスマスリースにしてさまざまな部署に配布もしています。

「種まきは春と秋に行っています。約3000粒ほどの種をセルトレイで育て、根付いたら花壇に植え替えています」と話すのは原島奨さん。1人1



21 KOMCEE裏の花壇

人担当する花があり、適切な栽培方法で育成していますが、どんなに忠実に世話をしてもうまくいかないことも。「発芽率が高い種も芽が出ないことがあります。虫や天候などにも影響されるので、時には情報をネットで検索するなど試行錯誤しながら育てています」と依藤壮太さん。花の状態を細かく確認し、「病気の予兆があればチームに報告し、相談しています」と山内勝隆さんは説明します。

花壇に使用する腐葉土作りも行っていると話するのは和田隆太郎さん。「落ち葉など集めたものを混ぜて発酵を促し、翌年完成します」。そして大切なのが除草や花がら摘み。「なかなか抜けない雑草は地面を深く掘り抜いています」と大石駿さん。なかでも注意が必要なのが、カタバミというクローバーに似た植物だと話すのは中安陸斗さん。「根に付いている小さな球根まで取らないと、また繁殖してしまいます」。

花壇のコンセプトや構図案を練っているのも環境美化チームです。アドミニストレーション棟と矢内原公園の間にある花壇は日当たりが悪いので、石を使ってロックガーデンにすることに。200kg以上ある石を運び花壇に設置した時は「充実した達成感を感じた」と依藤さん。メンバーが日々手入れをし、丹念に作った花壇を是非見てみてください。



左から和田さん、中安さん、山内さん、大石さん、原島さん、依藤さん。毎週、生け花を16か所に配布しています。

#WeChange Now

第15回 ジェンダー・エクイティ推進オフィス通信

在学女性学生による学校訪問事業

ジェンダー・エクイティ推進オフィスは、2010年から2024年度まで行なっていた「女性学生による学校訪問事業」を、今年度より「在学女性学生による学校訪問事業」にリニューアルし、8月からスタートしました。これまでの母校訪問事業は学生が名乗りを上げて母校に東京大学の魅力を伝える説明会を行なうものでしたが、この方式だけでは、訪問できる学校に限られるため、今年度から、従来の母校訪問に併せて、全国から東大生に説明会を開催してほしい学校（高校・中高一貫校を含む）を募集し、学校を訪問して東京大学の魅力を伝えたい女性学生を派遣する学校訪問事業を開始しました。今年度は、オンライン開催を含めて39校訪問する予定です。説明会では、現役東大生が、大学所在地やキャンパスの雰囲気、進学選択制度、経済的支援などの基本情報を紹介し、高校時代から現在に至るまでの経験や、東京大学に進学して良かったと感じている点について語ります。説明会の最後には、質疑応答の時間を設け、学生と中高生が直接交流することで、東京大学により親しみを感じてもらえる構成にしています。

これまで行なわれた説明会終了後アンケートでは、「今まで身近に感じられなかった東京大学が少し身近に感じられました」「東大が遠く離れた存在のように感じていたが（中略）とても楽しそうな大学だなと感じた。この講演会を機に東大に行きたい意欲が高まった」などの意見を多くいただきました。また、高校の先生からも「高校3年生にとっては憧れの東大生と交流することができ、さらにモチベーションを高めることができたようです」「生徒にとってとても良い意識づけになった」といったご感想をいただきました。

ジェンダー・エクイティ推進オフィスでは、東京大学に在籍している女性教職員・学生の支援のほか、女子中高生向けのイベントや広報などを企画・実行し、未来の女性東大生に向けても活動をしています(※)。皆様にもご興味を持っていただき、周囲の女子中高生にもご紹介いただけると嬉しいです!

(特任研究員 久保京子)



8月に行なわれた説明会の様子

※ ジェンダー・エクイティ推進オフィスウェブサイト「中高生のみなさんへ」



ワタシのオシゴト 第232回

RELAY COLUMN

ニューロインテリジェンス国際研究機構
総務企画チーム

小川 謙也

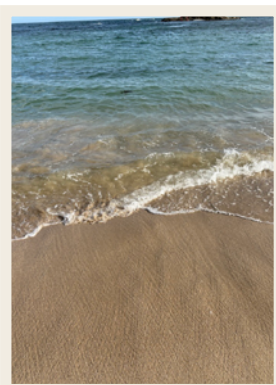
Keep your feet on the ground



医学部一号館の看板前で

今年8月、ニューロインテリジェンス国際研究機構（IRCIN）に着任しました。IRCINは、「ヒトの知性の起源とは」という問いに挑戦するために、2017年に設立されました。

私は、採用・退職の手続きから給与計算まで、教職員の皆様の人生に深く関わる重要な業務を担当しています。人事給与業務は、専門的な知識と高い正確性が求められる分野であり、的確な処理を行うためには日々の研鑽が欠かせません。また、IRCINは国際的な研究拠点であるため、複雑な制度を英語で説明する場面も多く、語学力と制度理解の両面での対応力が求められます。まだまだ知識・経験が不足しているため、周囲の皆様の温かいサポートには大変感謝しております。一步一步着実に業務に取り組み、本学の発展に微力ながら貢献できるよう尽力してまいります。



最近、デスクワークでなまった体を鍛えなおすため、ジムに通い始めたものの、おいしいごはんの誘惑に勝てません。健康のためにも地道に頑張ります。

暑さから逃げたくて、房総半島へ

得意ワザ：早寝早起き

自分の性格：とりあえずやってみてから考えるタイプ

次回執筆のご指名：白井道人さん

次回執筆との関係：採用当初から仲の良い同期

次回執筆者の紹介：会話のネタたくさんもっています

専門知と地域をつなぐ架け橋に

FSレポート!

第39回

教養学部3年

森田晃弘

教養学部3年

原 泰也

若者の移住を自分ごととして

私たちは、石川県能美市で、移住促進のためのシティプロモーションをテーマに1年間取り組みました。とりわけ大学卒業後などの若年層をターゲットにしたものであったため、「もし私たちが能美市に移住することになったら」という自分ごととしての視点からテーマについて取り組んでいきました。

私たちの活動で一つ特筆すべき点としては、能美市移住アンバサダーという、能美市への移住経験のある方からのご協力をいただいたことです。移住アンバサダーの方々から、ご自身の移住経験や、移住という視点から見た能美市の強み・改善点をお聞きしました。

これらを踏まえて、私たちはメンバーそれぞれの視点から、将来的に能美市にあるといいのではないかと考えたものや仕組みを提案しました。屋根付き電動自転車の推進、アプリやプラットフォームを用いた移住者コミュニティの形成、市内企業によるインターン活動といった内容で、どれも能美市の強みと改善点を掛け合わせることを意識しながら提案内容を考えました。

私たちは能美市への提案の中で、これらのほかに短期的な施策として五月祭への出展を提案しました。シティプロモーションを行っていく上で、若年層への市の知名度を上げることが重要だと考え、その中で私たちができることとして、大学生の多い五月祭が良いのではないかと考えたからです。五月祭ではグッズやお菓子を販売したり、陶芸体験で作った九谷焼を展示したりしました。市のキャラクターも活かしながら、能美市の魅力が伝わるようなブースづくりを目指しました。

五月祭当日は、市役所の職員の方や、過去の能美市のFS参加学生の方にもお手伝いいただき、多くの方にブースにお越しいただく事ができました。活動の中でお世話になった能美市の方や、能美市にゆかりのある方も来てくださって、とても嬉しかったです。ターゲットとしていた大学生や家族連れの方々にも、能美市の名前を知っていただけたという手応えを感じることができました。



様々な方とお話させていただきました

●メンバーはほかに、下田清太郎（工学系研究科修士2年）、山口彩乃（経済3年）

インタープリターズ・第217回 バイブル

理学系研究科准教授
科学技術コミュニケーション部門

鳥居寛之

SNS時代の情報発信と生成AI

人と人とのつながりが対面を超えて成立する時代。特にSNSの普及により誰もが情報発信できるようになったこの世の中だが、匿名性の高いこのデジタル空間に偽情報・誤情報が氾濫し、人々がそれを信じてしまうことの弊害が近年とみに指摘されている。溢れる情報を自分で選択したつもりでも、気づけば自分の意見に沿った見解だけしか目に入らないようになっていくという、フィルターバブルやエコーチェンバーの閉じた仮想空間に陥りやすい伝達構造に注意が必要だ。

こうしたSNSの特性は、情報化社会の新しい問題なのかと思いきや、「人は見たいものを見る」という認識は古くからあり、なんとカエサルスのガリア戦記に登場する言葉なのだという（*ferre libenter homines id quod volunt credunt*。＝たいてい人間は自分が望んでいることを喜んで信じる）。

原子・原子核・素粒子物理学の研究者である私が科学コミュニケーションの分野に関わるようになったのは、原発事故当時に放射線に関する玉石混淆のリスク情報が巷に錯綜し、科学者として正しい知識を伝えたいとの使命感から放射線教育活動を始めたのがきっかけだ。ただ、科学者が伝えたい情報と人々が知りたい情報は必ずしも合致しないし、人間の認知バイアスを考えても、拡散しやすいのは科学的に正しいというよりもむしろ感情的に心に刺さる情報の方である。

クライシス時にあっては、迅速性が最重要課題であって、人々の危険を煽るような感情的な情報は特に拡散しやすくなる。フェイク情報はスマホ片手にももの1分で作成できる一方で、科学的根拠に基づいた正確な文章を書き上げようと思ったら、専門家でもデータ収集、情報の検証や文章の校正まで、場合によっては数時間を要してしまうだろう。偽情報・誤情報との戦いは、要する労力と時間の圧倒的な非対称性から、科学者にとって勝ち目がないように思われる。

この非対称性を少しでも解消する方策として、進展すさまじい生成AIの活用が考えられるのではないかな。我々のプロジェクトでは、当時科学者有志が一般市民の疑問質問に答えた何千ものQ&Aの文章など、専門的な知識を生成AIに検索拡張生成（RAG）データとして読み込ませ、データや論文の検索、下書き原稿作成など、科学者の執筆支援に活用し、迅速な情報発信に役立てることを目指して研究している。AIを活用すれば薔薇色の未来というほど甘くはなかなうが、今や中高生でも日常的に利用している生成AIを、科学コミュニケーションに活用しない未来ももはやありえない。

HCD編 ききんのき

寄付でつくる東大の未来

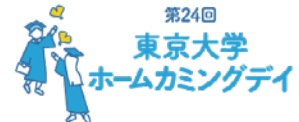
第71回

ディベロップメントオフィス
シニアディレクター

庄司英里

10/18開催！ホームカミングデイ

このコーナーで
ご紹介してきたホ
ームカミングデイ
が、いよいよ本番



を迎えます。「おかえり、つながり、銀杏祭」は、久しぶりに母校を訪れる卒業生はもちろん、教職員、在学生、近隣の方々、そして東大ファンなら誰でも参加できるお祭りです。ぜひお誘い合わせのうえ、本郷キャンパスにお越しください。今年は約130件の企画エントリーがありました。主なプログラムをご紹介します。



銀杏並木フェスタ ホームカミング
デイ名物「東大蔵元会利き酒」は過去
最大の18歳が参加、同窓会団体の出店、
学生運動部による体験コーナー、近隣
商店の飲食販売など、一日中楽しめます。運動会マス
コットキャラクター・イチ公はお子さんたちに大人気。
馬術部のお馬さんも三鷹の馬場からやってきますよ。

安田講堂 卒業後の節目を迎えるみな
さまをお祝いする周年祝賀式典、150周年
記念事業イベント、文書館の展示、寄付者
銘板の自由見学会など、普段はなかなか入
る機会のない安田講堂を見学するチャン
スです。15時30分からは安田講堂前広場に来場者が集ま
り、応援部のリードで東大の歌「ただ一つ」を歌います。



赤門音楽祭 音響効果に優れた伊藤謝恩
ホールで開催、管弦楽・合唱の同窓会をは
じめ、日本で唯一の学生ベネズエラ音楽合
奏団、本郷小学校生徒さんたちの合唱、な
つかしの一校寮歌を歌う会が出演します。

懐徳館庭園公開 旧加賀藩主前田
氏本郷本邸に起源をもつ庭園が本郷
キャンパスの南端にあるのをご存じ
ですか？ 学内の方でも訪れたこと
が少ないこの庭園を、当日限定で一
般公開します。



各教室での講演会、エンタメ、ワークショップなど



法文1・2号館ほか各学部棟では、伝統
の東大落語会寄席、華道部展示、東大
ならではの講師陣による講演会、無料
婚活セミナーなども行われます。

そのほかプログラム詳細は
特設Webサイトをご覧ください！

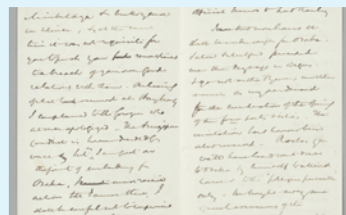


トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
8月7日	広報室	災害・防災・復興を多角的に考える 【前編】歴史に学ぶ首都集中の危うさ 【後編】平時と有事をつなぐ防災／シリーズ「キャンパスから読み解く」
8月8日	本部コミュニケーション戦略課	社会連携講座等検証・改革委員会による「改革策」について
8月14日	広報室	1999年創刊の広報誌が50号目に到達／『淡青』50号より
8月19日	大気海洋研究所	プランクトンに未来を託す国際提言 「プランクトン・マニフェスト」日本語版を公開
8月22日	本部コミュニケーション戦略課	NHK『プラタモリ』 8/23（土）から2週連続で東京大学を舞台に放送
8月22日	医学部附属病院	東京大学医学部附属病院とマヒドン大学医学部シリラート病院が覚書を締結
8月22日	附属図書館	総合図書館の貴重書アレクサンダー・フォン・シーボルト書簡集をデジタル公開しました
8月28日	未来ビジョン研究センター	第7回東京大学UTokyo Compass推進会議 (UCI) アドバイザリーボードの開催
9月3日	本部社会連携推進課	東京大学の学生がオリジナルボードゲームを共同開発 「笑う東大、学ぶ吉本プロジェクト」
9月3日	情報理工学系研究科、工学系研究科・工学部	東京大学RoboTechが「ABUアジア・太平洋ロボコン」で優勝！
9月4日	宇宙線研究所	スーパーカミオカンデからの新しい超新星アラート配信開始
9月5日	本部社会連携推進課	「笑う東大、学ぶ吉本プロジェクト」吉本×東大SP一挙放送のお知らせ
9月9日	ニューロインテリジェンス国際研究機構	ボストンで旭日中綬章伝達式 ヘンシュIRCN機構長の脳科学への貢献と日米学術交流を称える



CLOSE UP アレクサンダー・フォン・シーボルト書簡集をデジタル公開（附属図書館）



今回のデジタル公開にあたって、総合文化研究科・石原あえか教授が「資料の解説」の内容確認とドイツ語翻訳を行いました

総合図書館は、所蔵するアレクサンダー・フォン・シーボルト関係資料のうち「書簡集」の全点デジタル化を行い、新たなコレクション「アレクサンダー・フォン・シーボルト関係資料」(<https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/collection/siebold>)を公開しました。アレクサンダー・フォン・シーボルト (Alexander Freiherr von Siebold, 1846-1911) に関する資料群のうち、公開したのはBriefe (シー

ボルト書簡集)です。直筆の手紙をはじめ、電報の写しや彼が収集した資料など、様々な内容、言語、形態からなる紙片等を概ね年代別に閲覧できます。サイトの「資料の解説」ページには、資料をよりよく知るための関連資料をまとめています。膨大な量の紙片等からなる書簡集には、幕末から明治にかけての政治、文化をうかがい知ることができる資料が多く含まれています。ご活用ください。

表紙について

今号の表紙は、8月24日にモンゴルのウランバートルで行われた、アジア・太平洋地域の学生が参加する国際ロボットコンテスト「ABUアジア・太平洋ロボコン」決勝戦の一枚です。今大会の競技は「ロボットバスケットボール」で、各国・各地域の代表チームが高い技術力と創意工夫で作り上げたロボットで競技に挑みました。国内大会を制して日本代表として出場した学生サークル「東京大学RoboTech」(顧問：情報理工学系研究科

國吉康夫教授)は、スリランカ、マレーシア、インド、ベトナムを倒して決勝へ進出。香港と対戦した決勝戦では、最終盤で見事なダンクシュートを決めて6点差を大逆転し、劇的な展開で優勝を果たしました。RoboTechの「ABUアジア・太平洋ロボコン」での優勝は、オンラインを含めて5年ぶり、対面では20年ぶり、日本代表チームの優勝は2年ぶりです。栄誉の瞬間はABU公式YouTubeでご確認を！
https://www.youtube.com/live/L_5TRV88y4E



表彰式で称えられるRoboTechの皆さんと名誉の優勝トロフィー。おめでとうございます！

改修工事に入るため、しばらく姿が隠れます

「赤門特別見学会」を開催しました



←応募多数のため、見学会は3回に分けて行われました。↑かつては守衛が詰めていたという番所の内部。

赤門の改修工事の開始を間近に控えた9月10日、実際の赤門の前で本学教員の解説を聞きながらその歴史を振り返る特別見学会が開催されました。解説を務めたのは、赤門をはじめとするキャンパスの歴史に詳しく、「プラタモリ」でも案内役の一人として登場した松田陽准教授(人文社会系研究科)です。当日は、雨空の下、事前申込を経て選ばれた文京区在住・在勤者をはじめとする皆さんが集まり、松田先生の解説を傾聴。通常は閉じたままの赤門脇番所も特別に公開され、希望者がヘルメットをかぶって見学を行いました。赤門は改修工事のために10月から防護ネットで覆われた状態が続く、次のお披露目は2027年度となる予定です。



CLOSE UP 学生と芸人のタッグでボードゲーム「シランティア」を開発

(本部社会連携推進課)



←2500円で販売中の「シランティア」。↓学生と吉本芸人の皆さん。マヂラヴの村上さんは披露イベントでMCを担当！



東京大学と吉本興業株式会社が立ち上げた「笑う東大、学ぶ吉本プロジェクト」の一環として、2024年度の体験活動プログラム「オリジナルのアナログゲーム制作・PR体験」に参加した学生たちが、オリジナルボードゲーム「シランティア」を開発しました。

本プログラムでは、本学の学生と吉本興業の芸人の方々がチームを組み、ゲームのルールや内容のアイデアを出し合いました。イラストはネゴシックス氏（吉本興業所属）が担当し、株式会社ピチカートデザインの白坂翔氏・高橋俊介氏の監修のもと、カードを並べてオリジナルのティア表（格付けランキング表）を作るボードゲームとして完成しました。

「シランティア」は、ルールは誰でもすぐに理解でき、駆け引きも楽しめるのが特徴です。ポップで手に取りやすいデザインのため、幅広い世代の方々に楽しんでいただけます。現在、UTCCや東大生協でも販売中です。さらに、本ゲームの売り上げの一部は、今後、吉本興業株式会社から東京大学の体験活動プログラムへ寄附される予定です。この寄附により、参加する学生たちの学びや体験活動の支援につながります。

今回の開発を通じて、学生たちはアイデアの発想、チームでの協働、制作物のPRまでを一貫して体験し、実践的な学びを深めることができました。



CLOSE UP 東大病院とマヒドン大学シリラート病院がMOUを締結

(医学部附属病院)



シリラート病院で行われたMOU締結式

7月18日、医学部附属病院はタイのマヒドン大学医学部附属シリラート病院とバイオデザイン領域の連携促進を目的とした学術交流と協働に関する覚書（MOU）を締結しました。

医学部附属病院トランスレーショナルリサーチセンター（TRセンター）のバイオデザイン部門では、国内外の臨床現場や企業と連携した医療機器の開発支援プロジェクトに取り組み、ニーズ主導型のイノベーション創出に取り組んでいます。また、実践的な教育プログラムを通じて、次世代の医療イノベーターの育成も推進しており、国際的な連携による社会実装の加速を目指しています。マヒド

ン大学のマヒドンバイオデザインは、医学部（シリラート病院）、工学部、医療技術学部の連携により設立された教育プログラムで、クリティカルシンキングやデザインスキルの育成を通じて、医療分野向けの実用的なプロトタイプ開発を推進しています。

締結式は7月18日にバンコクの現地（シリラート病院）で行われ、TRセンターおよびシリラート病院のバイオデザイン部門関係者が出席しました。マヒドン大学側からは、医学部附属シリラート病院長の Apichat Asavamongkolkul 教授をはじめとする関係者が参加しました。



CLOSE UP 「東京大学の宝物」の特別コンテンツを公開

(本部コミュニケーション戦略課、人文社会系研究科・文学部)



「東京大学の宝物」と「文学部の宝物」より

8月22日、150年に迫る大学史のなかで培われてきた宝を紹介する特設サイト「東京大学の宝物」(<https://treasure.adm.u-tokyo.ac.jp/>) を公開しました。8月23日・30日放送のNHK「プラタモリ」が本郷エリアと東京大学にしかない宝に注目したことに関連したもの。なぜこの地に知が集い、人々を惹きつけ、未来を創り続けてきたのか。特設サイトでは、東大を形作る知・人・場という宝物を通して探ります。キャンパスの宝として、

赤門、三四郎池、懐徳館庭園、安田講堂、総合研究博物館、史料編纂所について、インタラクティブな地図や高精細な写真・動画とともに紹介しています。さらに、番組で2人の先生が案内役を務めた人文社会系研究科は、ホームページの「文学部の宝物」(<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/takara/index.html>) で、番組で語り切れなかった裏話満載の特別対談を公開。過去から受け継ぐ叡智と次代への挑戦が織りなすストーリーをご確認ください。



UTokyo 研究成果で味わう本格焼きあごだし

醸造学研究室の研究成果を活かした「だし」シリーズ。これまでだしには使われにくかった成魚や産卵後のトビウオを活用し、天然素材の旨味をじっくり引き出すことに成功しました！だしパックと濃縮タイプの瓶入り白だしの2種類をご用意。毎日のお味噌汁から秋の旬菜を使ったお料理が高級料亭に負けない本格的な味わいになること間違いなし！（田）

焼きあご白だし

(300ml)
¥1,500
(税込み)



焼きあごだしパック

(8g×10)
¥1,400
(税込み)



UTCCからのお知らせ



→オンラインストア



「脇見運転」のすすめ

タイトルを見て、おっとそれはアウトだろうとお思いになった方々が多いだろう。いえいえ、車の脇見運転ではない、あくまでも「」付きである。

昭和が終わった年、インターネットも携帯もない時代、私はアメリカの大学院に留学した。唯一ほっとする空間は、図書館の新聞コーナーで日本の新聞を読むことだった。ふと脇を見ると10カ国語くらいある。天安門事件、ベルリンの壁崩壊、同じニュースでも写真が微妙に違う。解釈とメッセージの違いに直面した。「脇見運転」が教えてくれた国際社会の本質である。

アメリカで研究を始めて1年目、図書館で雑誌をペラペラとめくっていると、ふと目についた論文「嗅覚受容体遺伝子候補の発見」。『時をかける少女』でラベンダーの香りの“力”を知り、大学時代の恩師が教えてくれたB級グルメの美味しさ。これだ！においだ、私の心で温めていたやりたかったことは。雑誌の「脇見運転」が示唆してくれた私の生涯研究である。

「脇見運転」にも種類がいろいろある。隣の庭は青い、の脇見ではいけない。あくまでも、その時の目標は定まってい、「たまたま」

の寄り道、である。人生は全て「たまたま」が好転機になる。効率を追求して無駄をなくす作業だけでなく、「たまたま」の脇見ができる余裕、「たまたま」の脇見から生まれる出会いをものにする力も大切だ。

最近教育研究をしていると、あれやこれやと忙しく、「脇見運転」ができない。それどころか、前を見ていても、入ってくる車窓が本物なのかバーチャルかも見極めることも難しくなっている。Society 5.0の中で、運転している自分を見失いがちだ。ロジックのない不確実性に対応できる身体感覚を鍛えなくてはと思う。

7月の研究分野アンケートでは、これから25年で必要と思う分野は「感覚・感性」と書いた。大学全体としては、の問いには、「脇見運転」がしにくいトップダウン研究でなく、分野を指定しない「新芽を育むボトムアップ研究」と書いた。「脇見運転」ができる精神的時間的余裕をつくれば、アイデア豊富で新芽をだせる優秀な教員が東大にはたくさんいる。

東原和成
(農学生命科学研究科)

